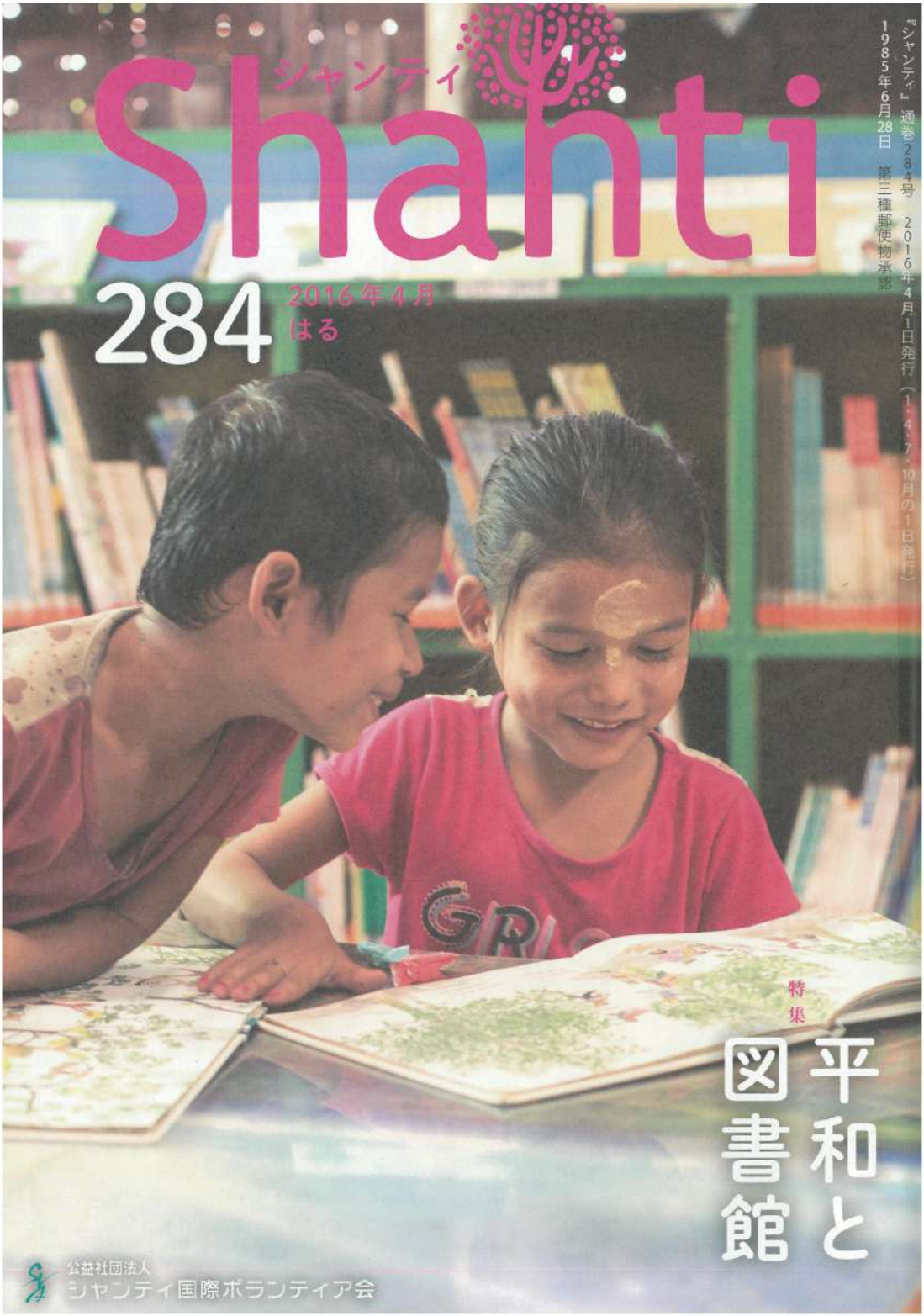
シャンティ Shanti

284

2016年4月
はる

『シャンティ』通巻284号　2016年4月1日発行（1・4・7・10月の1日発行）
1985年6月28日　第三種郵便物承認



特集

平和と図書館

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

せめて図書館の中では平和を感じてほしいという願いを込めた
ミャンマー（ビルマ）難民事業が15年の節目を迎えました。
本国から逃れてきた難民たちに母語の本を届け、人びとの居場所となるよう、
キャンプ内でコミュニティ図書館を運営しています。
ミャンマー本国の民主化に伴い、難民の自主帰還の兆しが見えてきましたが、
長い紛争、難民生活で傷ついた難民たちは帰還に不安を持っています。
「帰還した先にも図書館が欲しい、ここにある本を担いででも国境を越えたい」
という声が出ており、本が人びとの心の支えになっていることを感じます。
そして、日本でも戦時中に本を疎開させた取り組みがあったことを知り、
極限状況にあっても本を守ろうとする人の思いは
国境を越えても同じなのだと実感しました。
シャンティが図書館での活動に込めた平和への願い、お届けします。

表紙写真：メラマルアン難民キャンプの図書館にて（写真：川畑嘉文）

目次写真：Naw Ni Moo さん（18）。16 歳で結婚し高校を中退、
子ども連れで図書館に行くようになった。2003 年にメコンカからメラウキャンプに来た。
「いつか美しい故郷に帰って、米を作り、豚や鶏を飼いたい」
（写真：渋谷敦志）

シャンティ 284号 目次

Index

04 **定点観測：アジアから**
タイ／カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ／アフガニスタン／ミャンマー

26 **岩手／気仙沼／山元／東京**

10 **特集　平和と図書館**
ミャンマー（ビルマ）難民キャンプのコミュニティ図書館
特別寄稿　図書館員は資料を救う・守る
日本図書館協会元事務局長　松岡要

21 **わたしたちのお祭り**
カレン族　ラクキチュ祭り

22 **世界の絵本を読んでみよう**
『学校に行きたいワー・ワー・ポー』創作絵本　ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

24 **シャンティな人たち**
荒川区職員ボランティア協会（AVA）

30 **緊急救援室から**　常総市　ネパール
31 **おしらせ／編集後記**
32 **道**　「友だちと一緒に絵本が読めた」
専務理事　茅野俊幸

スラム出身の警察官　――元奨学生の現在

報告：吉田圭助（シーカー・アジア財団）

タイ **Thailand**

タウィーサック・スリーグラトゥムさん（写真：愛称はティー）は、現在26歳、スアンプルー・スラム出身の元奨学生です。

中学校1年から高校3年までの6年間奨学金を受けました。スラムが火災に遭う前まで、自宅はシャンティが運営する図書館の向かいにあり、放課後はよく通ったそうです。両親は縫製の仕事をしており、当時1着縫い合わせて20バーツ（日本円で約630円）の収入と、生活は困難でした。「奨学金は大変ありがたかったです」と振り返ります。

現在、ティーさんは麻薬の取締りを担当する駆け出しの警察官です。生まれ育った地域は麻薬問題が深刻で、貢献できればという思いで自ら配属を志願しました。私が彼の話を聞く傍らでミシンをかけていた母が「危険を伴う仕事だけれど、彼がやりたいことなので」と言い、ティーさんが苦笑しました。「警察官は、子どもの頃から憧れていた職業の一つ。自分と同じような境遇にある今の奨学生たちも、この機会を大切にして夢を叶えてほしい」と力強く続けました。元奨学生が後輩たちを応援しています。

伝統文化事業の年次セミナー

Cambodia カンボジア

報告：プロム・ニー（カンボジア事務所）

カンボジア事務所では、2014年から仏教学校における図書館推進プロジェクトを実施しています。2年間でプノンペンとコンポンチャム州の6ヵ寺に図書館を開設しました。昨年末に、これまでの活動内容の共有とより良い図書館運営の方法を学ぶことを目的に、対象6ヵ寺の図書館活動に関する年次セミナー（写真）を開催しました。

セミナーでは6つのグループに分かれ、各図書館が抱える課題やその解決方法、図書館の維持管理について議論しました。出席者は図書館の運営等に関して学びましたが、同時に図書館員の経験不足や資金調達などの課題も浮きぼりになりました。しかし皆がこれらの課題から逃げずに、図書館をより良くするために日々活動しています。

セミナー参加者の一人、チェイ・キリ仏教学校副校長のコサルさんは「今回の研修は、互いの図書館の現状を知ると共に、来年度の活動計画を立てる上で勉強になりました。今回学んだ知識を実際の運営に活かしていきたいです。ご支援頂きました日本の皆さま、本当にありがとうございました」と話していました。

新米教員の決意

報告：山室仁子（ラオス事務所）

ラオス **Laos**

ポンケオ小学校のエー先生（写真：学校に隣接する教員宿舎にて。川畑嘉文撮影）は22歳。2015年秋に3年生の担任として教員になったばかりです。

「幼い頃に、教員だった父親を亡くして、親戚の家に奉公に出ました。農作業や家事の手伝いなど、できることは何でもしました。そのときの生活は辛かったですが、援助を受けて学校に通うことができ、勉強できることの嬉しさと大切さを身をもって知りました。将来について考えるなかで、尊敬する父のようになりたい、そして父の分まで教員として勉強の大切さを子どもたちに伝えたい、と強く思うようになり、教員になる道を選びました。

私が勤務するポンケオ小学校は出身村から遠く離れたカム族の村にあります。ラオ族の私はカム語が話せず、せっかく生徒が相談や勉強の質問に来てくれるのに、今はまだ言葉の壁にぶつかってしまいます。尊敬される教員になることが私の夢なので、生徒とのコミュニケーションに励み、良い授業ができるように日々努力していきたいと思います」。

難民キャンプのクリスマスとこれから

BRC ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

報告：山中裕太（BRC事務所）

2015年12月、1年間の事業内容を振り返る年度末会議が各難民キャンプで行われました。翌年の事業をより良いものにしようと、皆の眼差しはとても真剣です。

会議が終わると、毎年恒例のクリスマスプレゼントの交換会が始まりました。どのプレゼントも綺麗に包装がされており、わくわくさせてくれます。BRC事務所でインターンをしている私もこの会に参加し、手紙が添えられたぬいぐるみやタオルを貰いました。もらった手紙にはこのように書いてありました。

「図書館活動を通じて多くの経験ができてよかったです。親愛なる友人のあなたに幸せがたくさん訪れますように」。

今年は国際支援の減少などから、難民の人々が帰還準備をより一層求められることが想定されます。各人ができるだけ納得できるかたちで準備が進められることを切に願い、それらが皆にとっての幸せに繋がるよう、私たちも共に歩んで行きたいと思います。

被災後2ヶ月間支援を心待ちにしていた人びとに食糧と毛布を届けました

報告：三宅隆史（アフガニスタン事務所）

アフガニスタン Afghanistan

2015年10月26日、アフガニスタン北東部を震源地として発生したマグニチュード7・5の地震によって、107名が亡くなり、5600世帯の家屋が倒壊しました。1月から始まる厳寒期を前に、被災者は越冬のための支援を必要としていました。

当会は、事務所のあるナンガハル州とクナール州で調査を行い、被災後2ヵ月たっても援助団体から支援を受けたことのなかった地域を対象に、家屋を失った500世帯を選定し、1ヵ月分の食糧と1世帯あたり7枚の毛布を1月中旬に配布しました。

地震で夫と息子を失ったある女性は、食糧と物資を受けとった際、これらは日本の人びとからの支援であると伝えたところ、「日本がどこにあるのか知らないのですが、40年間使っているSONYのラジオが日本製であることは知っています。日本の皆さんからの支援に心から感謝します」と話しました。

本事業はジャパン・プラットフォーム（JPF）からの助成金により実施しました。

移動図書館バイクがさらに走ります

Myanmar ミャンマー

報告：中原亜紀（ミャンマー事務所）

「もっと頻繁に来てもらえないでしょうか。喜んでいる子どもたちの姿がまた見たいです」。タヤワディ県ナタリン公共図書館が初の移動図書館活動を寺院小学校で行ったときの、校長先生の一言でした。

2015年10月から同県で児童サービスを開始し、三輪バイクを走らせての移動図書館活動もスタートしました。ミャンマーではほとんどの小学校に図書室が設置されていないため、公共図書館に通えない子どもたちには絵本に触れる機会がほとんどありません。移動図書館活動の対象となっている小学校では、絵本を積んだ三輪バイクの到着を心待ちにしてくれています。

ただ公共図書館の職員数が不足しているため頻繁に訪問できないことが課題です。これを解決するため、移動図書館活動終了後に絵本の貸出しを行うことになりました。蔵書数に限りがあるため多くは貸出せませんが、学校との協力のもと絵本に出会えた喜びが少しでも長く続いてほしいと願います。そのために移動図書館バイクはこれからも走り続けます。

特集

平和と図書館

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプのコミュニティ図書館

どうなるミャンマー

アジア地域ディレクター
ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所所長
八木沢克昌

昨年11月に歴史的な総選挙が行われたミャンマー。選挙ではアウンサンスーチー党首が率いる最大野党国民民主連盟（NLD）が圧勝した。この結果により、半世紀以上にわたった「軍人支配」に終止符が打たれた。スーチー氏主導の政権が2016年の3月には発足する見通しだ。

選挙から1カ月後に、ミャンマーの最大都市ヤンゴンと北西へ約300キロの活動地バゴー地域・ピー県等を訪れた。都市と地方で様々なミャンマーの人びとの声を聞いた。

NLDの圧勝の要因として多くのミャンマー人が口にしたのが、「長年続いた軍人支配を終わらせるためにNLDに投票した」。「NLDへの期待よりも、軍政にノーを突き付けたかった」のだという。

だがNLDが圧勝しても、現在の憲法ではスーチー氏は大統領に就任できない。また内務大臣、国防大臣、国境担当大臣の主要3ポストは軍が指名できるからだ。

今後、誰が大統領になるのか、彼女は大統領をどうコントロールするのかに、注目が集まる。

ミャンマーは、今後民主化問題よりも民族問題が大きな課題となる。実際、北東部のシャン州や北部のカチン州等では今も戦火が収まっていない。多数派のビルマ族を中心とした政府と少数民族の間には、民族問題が60年以上も続いている。

タイ側の難民キャンプには、スーチー氏率いるNLDの圧勝を好意的に受け止めて期待する人が多い。しかし現在はまだ、新政権の少数民族との対話や方針を見てから祖国への帰還を決めたいという声も大きい。

新政権は、国民の所得や貧困解決、教育の向上を目指すが、その実現は容易ではない。特に教育はASEANで最悪レベルといわれるほど課題が山積している。新政権による、少数民族を含む全ての子どもたちへの教育機会の改善が、貧困や格差や差別を是正し、過去の歴史の傷を癒して前向きな平和を構築する基礎になるのではないだろうか。

2000 メーホーソン県メーサリアンに事務所設立
メコンカキャンプ（現メラウキャンプ）、メラマルアンキャンプにて図書館事業開始
2001 タック県メーソットに事務所設立
2003 カンチャナブリ県ムエンに事務所設立
バンドンヤンキャンプ、タムヒンキャンプに事業拡大
2005 人形劇（キャラバン公演）の開始
2006 図書館青年ボランティア（TYV）の設立
2007 「絵本を届ける運動」の絵本を届ける
2009 この年から「難民子ども文化祭（RCCF）」が開催される（年1回）
2010 図書館運営研修の強化
2012 「世界難民の日」、サッカーフェスティバル開催
2014 コミュニティ情報掲示板・オフラインパソコンによるミャンマー国内・国境沿いのニュース、難民に関する情報提供の開始

難民は今

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所
プロジェクトマネージャー
菊池礼乃

タイ・ミャンマー（ビルマ）国境にある難民キャンプは、1984年に設立されてから今年で32年目を迎えました。タイ側国境にある9ヵ所の難民キャンプには、2015年末現在、約10万4千人の難民が暮らしています。近年、難民の自主帰還の議論が進む一方で、国際支援の減少により人びとの生活は年々苦しくなってきており、多くの難民が見えない将来に不安を感じています。

「難民の自主帰還」に向けた準備の進展

2011年の民政移管以降、ミャンマー（ビルマ）国内の政治情勢の変化や、政府と少数民族勢力の間の停戦合意を受けて、タイ側難民キャンプでは、難民キャンプの代表、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、NGO等の間で、「難民の自主帰還」の議論が進んできました。2015年には、帰還に向けた実施計画が作成されるようになり、難民キャンプの代表による帰還候補地の視察も始まりました。一部の難民キャンプでは、住民による帰還候補地視察も奨励されており、国境を越えた行き来が増えてきています。難民キャンプの代表は、まだ帰還できるタイミングではないと明言しているものの、帰還に向けた準備が着実に進んできています。特にミャンマー（ビルマ）国内では、2年間にわたる停戦交渉の結果、2015年10月に全国停戦協定がカレン族系団体を含む8組織が先行する形で締結され、さらに、11月には総選挙の結果、アウンサンスーチー議長率いる国民民主連盟（NLD）が圧勝するなど、政治的なターニングポイントを迎えようとしています。

国際支援の減少と人材流出

難民キャンプを含め、タイ側国境に住む難民や移民への国際支援は年々減少しており、難民キャンプの中でも、特に食糧配給量の削減や様々な社会サービスの減少が人びとの生活に大きな影響を及ぼしています。こういった国際支援の減少の背景には、ミャンマー（ビルマ）国内が徐々に開けてきたことにより、支援が国内へ移っていること、さらにシリアをはじめ世界全体を見た時により緊急性の高い難民問題が発生していることなどがあります。そのため、難民の中には、家計を支えるため少しでもよい収入を得られるようにキャンプの外に出て働く人や、さらにキャンプの中でも給与の高い職へと転職する人が増えてきています。例えば、教育分野においては、給与の低い学校教員のなり手が少なく、1年間で約半数の教員が交代するといった状況があります。また、NGOの難民キャンプ内での職員の人材確保も非常に難しいことが大きな問題となっています。

第三国定住へ向けた最後の決断

第三国定住を理由とした人材の流出も続いています。タイ国境ミャンマー（ビルマ）難民キャンプからは、2005年から2015年末までに約10万2千人の難民がアメリカ、オーストラリアをはじめとした第三国へと渡っていきました。特に、2013年までにこれまで第三国定住した人々の約8割を受け入れてきたアメリカへの集団定住の募集が締め切られることになり、これまで何十年も将来の選択を決めかねていた人々が、最終的には第三国定住を選び、難民キャンプを離れていくという状況を特にこの1～2年で数多く見てきました。第三国定住へ応募してから、実際に難民キャンプを出発するまでは数年かかるため、2016年以降も第三国定住で難民キャンプを出発する人びとは出てきますが、その数は今後少なくなっていくことが想定されます。

上：ある家族の食事／下：教員の度重なる交代で教育の質が下がる恐れがある

見えない将来への不安

見えない将来に不安を感じる人が増えてきています。このような状況を背景とした、若者の非行（薬物使用や飲酒による暴力事件など）や自殺の増加が近年難民キャンプで問題となっており、難民キャンプの代表もなかなか対処方法が見いだせない状況にあります。2015年末のニュースでも難民キャンプの自殺の増加が取り上げられ、人口約4万人弱のメラ難民キャンプでは2015年に14人の方が自殺で亡くなりました。（2014年統計で、10万人あたりの自殺率は、日本では20・9人、タイでは6・1人）

難民の今後

今後も、自主帰還の議論、国際支援の減少、人の流出は止まることなく進んでいくことになります。この状況の中で、カレン族が多い難民キャンプでは、2016年2月に7ヵ所の難民キャンプを代表するカレン難民委員会の選挙、3～4月には各難民キャンプのキャンプ委員会の選挙が予定されており、選挙後、新しいリーダーたちが、帰還に向けた重要な局面での舵取りを担うことになります。これまで15年に渡って難民に寄り添い続けてきた私たちにできることは、それぞれの難民が将来的にどの道を選ぶにしても、彼らの決断を支え、難民キャンプがなくなるその日まで図書館活動を通じて人びとを励まし続けることだと考えています。

コミュニティ図書館の意義

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所
所長代行
ジラポーン・ラウィルン（セイラー）

上：図書館に来る子どもたち
右：図書館員、学校教員向けの研修会の様子／左：パソコンを通した情報提供活動

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所では、2000年から現在に至るまで、コミュニティ図書館を通してミャンマー（ビルマ）難民キャンプの人びとを支えてきました。私たちは、コミュニティ図書館活動を通して、教育、文化、そして情報の提供という分野に焦点を当てながら、難民キャンプ内の教育関係者、図書館関係者と協力して、難民キャンプに住むすべての人を対象にした読書推進、そして教育の機会の提供を行っています。近年、難民キャンプ内の教育現場では、教員や教材の不足、国際支援の減少など様々な課題があり、難民の自主帰還に向けた移行期に当たる中で、教育NGOの緊密な連携が必要になっています。私たちは、引き続き難民キャンプの教育部会や教育に関わる支援団体と協力しながら、教育分野でさらに実りある成果を出していきたいと考えています。

コミュニティ図書館事業に15年間関わってきた経験の中で、私は、図書館に来る子どもたちの様々な変化を目の当たりにしてきました。読書やゲーム、おりがみやおもちゃ作りなどにも自由に参加できる図書館活動や本の読み聞かせを通して、子どもたちは新しいことを学ぶことに自信を持つようになり、精神的にも徐々に成長してきました。それは、図書館で日々子どもたちと接する図書館員も実感しています。ウンピアム難民キャンプの第3図書館で働く図書館員はこのように話しています。「10歳の女の子、ポー・セイちゃんは、両親が離婚し、現在は伯母と一緒に暮らしています。彼女がはじめて図書館に来たとき、彼女はとても荒っぽくて、大人の図書館利用者や図書館員も含めて誰に対しても敬う気持ちがなく、私がどんなに話しても聞く耳を持ちませんでした。しかし、それから数ヵ月経つうちに、彼女は驚くほど変わったのです。彼女は他の子どもたちと話すようになり、大声を上げることもなくなり、図書館内の本や文具を壊さなくなりました。その後、彼女はまだ幼い2人の妹たちを図書館に連れてくるようになり、一緒に図書館活動に参加し、絵本の絵を楽しそうに眺めています。2人の妹はまだ幼く、私たちの言うこともあまり聞きませんが、彼女たちもいつかポー・セイお姉さんのようになり、図書館でたくさんのお友だちを作るでしょう」。

これは一つの事例ですが、私たちのモニタリングや評価を通して、コミュニティ図書館が子どもたちの識字能力の向上、そして彼らの態度や行動にも大変良い影響を与えることが明らかになっています。

また、コミュニティ図書館は、子どもたちだけでなく、難民キャンプの青年層にも良い影響を与えています。近年、難民キャンプでは、勉強についていけない生徒の退学や、将来への希望が見いだせない青年による薬物の使用や飲酒などの非行が問題になっています。このような青年層の課題がある一方で、図書館活動を通して、生きがいを見出し、よりよい将来を目指して進んでいく青年たちがいます。私たちの事業では、7ヵ所の難民キャンプでそれぞれ20人ほどの図書館青年ボランティアが活動しています。私たちは、彼らが図書館活動に関わるスキルを習得し、子どもたちへの読み聞かせ活動や人形劇を行うことができるように、毎年研修会を開催しています。この活動を通して、多くの青年ボランティアが様々なスキルを身に付けています。彼らは、積極的に図書館活動に参加し、活動を作り上げることに対する自信も持っています。この経験は、周りの人びとに対する思いやりを育み、自分たちの未来に対して前向きに考えることにも繋がっています。彼らは、「図書館活動に参加することを通して、リーダーシップやマネジメント能力など、様々な能力を身に付けることができました。もっと多くの知識や技術を学んでいきたいです。」と話しており、図書館活動が、彼ら自身の居場所となり、よりよい未来へ向けて前へ進むための源となっているようです。

私は、難民キャンプの人びとにとって、図書館活動が、教育の重要性や本当の幸せ、友だちの作り方や人生の楽しみ方、他人に対する思いやり、コミュニティの一員としてコミュニティの活動に関わること、よい経験を共有することの大切さに気付くきっかけになっているのではないかと思います。それは、子どもたちはもちろん、その周りの人びとも同様です。

私たちがはじめて移動図書館活動を難民キャンプのすべての学校を対象にして行ったとき、多くの教員がこれに難色を示しました。なぜなら、教員たちは本を管理するこ

とや生徒に本を読むよう促すことに負担を感じていたからです。しかし、教員向けの研修会や彼らとの話し合いの中で、学生への読書推進の重要性を少しずつ理解してもらい、今では私たちの活動が難民キャンプ内のほとんどの学校に受け入れられています。これは保護者についても同じことが言えます。難民キャンプに住む保護者は日々の家事で大変忙しく、子どもたちの教育に関してはすべて学校に委ねていましたし、放課後の家事の手伝いができなくなるため、当初は図書館に子どもたちが行くことも許しませんでした。しかし、図書館活動や研修会に参加したり、住民やコミュニティリーダーとの対話の場を設けることで徐々に賛同を得られるようになり、今では多くの保護者が図書館を訪れるようになりました。その中で、彼らは子どもたちの教育に関心を持つようになり、教育の重要性を見出していったのです。

ヌポ難民キャンプの副委員長であるノー・ポー氏は言いました。「私はコミュニティ図書館が難民キャンプの人びとに多くの恩恵を与えてきた光景を見てきました。彼らは図書館で本を読み、リラックスをし、最新の情報を手に入れてきました。あらゆる年代の人々が利用でき、一切お金はかかりません。いつか私たちがカレン州に帰った際にも、この活動を是非続けてほしいです」。コミュニティ図書館活動は、子どもたち、青年、親、教員、図書館員など、コミュニティ図書館活動を利用するあらゆる人から大変好意的に受け止められています。

移動図書箱を利用する学校教員

私たちは多くの難民キャンプの人びとと共に歩んできました。私が働いている中で本当に幸せを感じる瞬間は、図書館活動を通して人びとが変わる姿を見た時です。たとえば彼らが教育や文化、図書館の重要性を理解するようになり、自分自身を発展させ、教育を支えるためにどんなことでも一生懸命に努力する姿を見るときは、とても幸せな気持ちになります。

私は、コミュニティ図書館が、どの場所においても、どんな状況にあっても、普遍的な教育を提供できると信じています。コミュニティ図書館は、教育の質を高め、誰もが参加できる包括的な教育を生み出します。そして平和を構築していく上で、教育や図書館がその重要な一翼を担っており、この活動が、いつかミャンマー（ビルマ）に真の平和をもたらすことを信じています。皆さまの支えがなくては、ミャンマー（ビルマ）は変わることも発展することもできません。皆さまの継続的なご支援やミャンマー（ビルマ）難民に対するご理解に心から感謝しております。

ミャンマーと難民キャンプ、本を守った人びとを知る6冊
BOOK GUIDE

観光コースでない ミャンマー〈ビルマ〉——もっと深い旅をしよう
宇田有三（高文研）
軍事独裁政権下、22年にわたり当時誰も入れなかった地域での潜入取材を繰り返して全土（7州8地域）を踏破したフォトジャーナリストによるルポルタージュと観光案内。特に、ロヒンギャ問題に関しては詳しい。

ラオス 山の村に図書館ができた
安井清子（福音館書店）
1985年から、ラオス難民キャンプで図書館活動に携わった著者が、少数民族モン族の住むラオスの山間の村に、子どものための図書館をつくった。
村に暮らしながらの建設の日々、完成した図書館での活動のようす、そして未来を語る。

希望への扉リロダ
渡辺有理子、小渕もも／絵（アリス館）
ミャンマーの故郷を追われた少女・マナポがたどりついた、タイの難民キャンプ。なに不自由ないくらしだが、なにか足りない。マナポは、図書館員になり、民族の誇りと希望をとりもどしてゆく。著者は2000年から3年間、難民キャンプでの図書館員養成に携わった。

物語　ビルマの歴史 王朝時代から現代まで
根本敬（中央公論新社）
著者はビルマ近現代史専門家。王朝時代に始まり、イギリス植民地時代や日本軍による占領期、軍政期、そして2011年の民政移管後までの国の変遷について、丁寧かつ網羅的に記述。歴史の流れを汲むことで、現在の国家情勢がより深く理解できる。

3万冊の本を救った アリーヤさんの大作戦——図書館員の本当のお話
マーク・アラン・スタマティー、徳永里砂／訳（国書刊行会）
イラク戦争の中、自分たちの歴史と文化を守る決意を胸に、図書館の本を救った女性司書アリーヤさんと仲間の心温まる物語を、アメリカの人気漫画家であり、児童向けの絵本作家としても活躍のスタマティーが描く。

疎開した四〇万冊の図書
金高謙二（幻戯書房）
太平洋戦争末期、大八車を押し、あるいはリュックを背負って、何度も貴重な本を運んだ人々がいた。
旧都立日比谷図書館の蔵書40万冊を疎開させ、知と文化を戦火から守った人々を追うノンフィクション。

特別寄稿

図書館員は本を守る、救う

日本図書館協会元事務局長
松岡 要

日本図書館協会資料室に納められている全国の図書館史

『疎開した四十万冊の図書』で伝えられた、戦争末期に貴重書を守ろうと運び保管した人たち。しかし、それは特別なことではなく、当時、本を守ろうとした図書館員が全国にいました。そして、イラク戦争時にも同じように行動した人がいたことからも、時代や国境を越えて、本を守ってきた図書館員の「DNA」を心根に感じます。そこで、日本図書館協会元事務局長の松岡要さんから図書館員の活動と、その役割について寄稿していただきました。

金高謙二監督による映画「疎開した四〇万冊の図書」と同名の著書により、戦争のさなかにあって図書を救い、守った図書館員たちがいたことが広く知られることになりました。折からの「安保法制」の動きもあってか、各地での自主上映会も続いています。当初金高監督から、「本の疎開についてまったく知らなかった。こんな話しが埋もれてしまっているとは不思議」と言われたとき、意外な気持ちをもったことを思い出します。図書館員たちの間では良く知られていたことで、そのような歴史、先輩たちがいたことを誇りにも思っておりましたが、これは広く知られているわけではないことを改めて分かった次第です。

監督から関連する資料の照会依頼があったこともあり、改めて全容を調べようと思い、日本図書館協会資料室が所蔵している資料を点検してみました。各地の図書館が、その歴史を記録した「〇〇図書館〇年史」などという書名の図書はかなりあります。それを1点ずつ手に取って、戦中の1943年から45年にかけての記事、記録などを点検してみました。その精粗は多様ですが、30ほどの図書館に関連の記述があることが確認できました。

日本への初空襲は1942年4月。翌年11月帝国図書館は長野県に第一次貴重書疎開を始めるとともに、隣接の帝国博物館の地下にも移動させます。文部省は12月に都道府県中央図書館長会議を開催、〝戦局ニ応ジタ国民思想指導ノ重要ナ一環ヲナス〟中央図書館の役割を訓示、その具体化を図る20項目ほどの指示事項のなかで「防空に関する件」として「貴重図書の疎開」を挙げました。東京の日比谷図書館は1944年2月から、民間の研究者から「重要資料」の買上げ・疎開の事業を実施します。

国家総動員体制が行政、国民生活の隅々までにおよんでいる戦時体制のもとでの図書疎開事業です。図書館員たちの徴用、金属書架の供出、図書館休館などの事態が全国的に続出するなど、その存在自体が危ぶまれる状況のもとで実施された事業展開です。

当時、帝国図書館で疎開事業に携わった司書官は次のように述べています。

「この文化遺産を以て日本民族の文化的系図として世界に誇らなければならない。従って之を仇敵米英から如何にして衛る可きかと云ふことは我々に課せられた重大な仕事である。」（東京新聞1944年12月20日）

「ヨーロッパでは中世の暗黒時代僅かに修道院と貴族が文化財を破壊から守りその後に来る文藝復興の貴重な資料となった。これと同様にわが國でも戦國時代の間を通じて五山の僧がその文化を守り通した。現在直接戦力にならぬとしても二千六百年の間続いて来た我が國の尊い歴史を傳へるためにはどうしても貴重な文典を残さなければならぬ。個人の蔵書の寄託を受けるという方法を考へてゐるし現に具体化しつつある。しかし明治以後の活版本は殆どそろってゐるから一般の人のを何でも預かるのではなく學者の筋金の通った蔵書に限ってゐる。これもなるべく買受けて図書館のものとして保存したいと思ってゐる。この買入れる資金があればまだまだゆづり受けたい蔵書が澤山ある。また実用的な書籍を疎開させて地方で開館閲覧させるといふことも考へぬではないが、実行は困難である。」（朝日新聞1945年6月13日）

ここには戦争遂行、国体を護るために図書を守るという考えを色濃く感じます。「図書館の決戦体制・戦闘配置」（読売新聞1943年10月15日）と言われているもと、自由な考え、発想は許されるものではありませんから当然ですが、同時に、資料は保存すべきだ、という図書館員としての信念をあえて述べていることに感じ入ります。この司書官は、警察からの発禁書の押収要請に対して「保存する方針」だとして応じてこなかったことやGHQからの接収を避けることに腐心したことを後に述懐していました。東京の図書館員も、政府の「貴重図書の疎開」との指示を図書館所蔵の図書に限定せず、民間の図書も対象として、救おう守ろうと、東京都の疎開方針をつぶさに

ある館長の記録

可能性守るために

図書疎開に奮闘した図書館員を調査した記事
（『西日本新聞』2014年8月14日）

調べ、当局に予算獲得の交渉をするのです。

図書の疎開を記述した30にもおよぶ図書館の記録には、こういった業務として行ってきた事業、制度的な予算が伴ったものばかりではないと思われます。同僚たちと相談して、中心地から離れた場所に居る知合いに預けることもありました。夜中に空襲があると、自宅のことも省みず図書館に飛び出していく、といった図書館員の話しを聞いたこともありますが、こういった図書館員のなかには自発的に図書を他の安全な場所に移す、といったこともしたようです。

戦後落着いたとき、どこからともなく本が戻って来ており、書架に並んでいた、という話しがあります。それらを書き残した手記といったものに接したことは残念ながらありませんが、話しとして聞いたことがあります。

2003年イラク戦争のとき、バスラの図書館員が3万冊の本を救った話しがあります。「戦争の火が本を滅ぼしてしまうこと」を恐れた図書館員アリーヤさんが「図書館の本を戦争からまもることのできる安全な場所にうつしてほしい」と当局に求めます。拒否されたアリーヤさんは、「みずから行動をおこすことにして」、「毎晩毎晩、図書館が閉まったあとに、図書館の本をじぶんの車で自宅にはこびいれました」。さらに知合いや街の人たちに助けを求め毎夜、みんなの家に運びます。図書館は焼失しましたが、3万冊が救われたのです。この事実はニューヨーク・タイムズで報道され、絵本などにもなりました。

戦争は図書館にとって最大の破壊行為です。疎開事業に尽力された図書館員の秋岡梧郎さんは、図書館員が文献を戦禍から守るために一生懸命やってもだめ、戦争を止める以外はない、と述べました。空襲によって焼失、被災した図書館は50を超えます。図書館員として戦争につながることを許さない表明は重要だと思います。同時に、現在の日本の図書館はどうか、考えざるを得ません。「平時」である現在、図書館資料の破壊があります。

図書や雑誌が安易に廃棄されている事態があります。周辺市区町村の図書館と分担して保存を続けていた雑誌を廃棄する指定管理者の図書館があります。「複本」は持たないとして、入手困難な図書、その貴重な内容を顧慮することなく大量に廃棄している図書館もあります。このような事態を招いている要因に、図書館員体制の脆弱さにあります。司書の採用や配置をしないところが増え、また正規雇用の図書館員は全職員の3分の1に激減しています。司書のいない図書館は4割にもなっています。5年後、10年後など将来を見据えて蔵書構築を図る、70年前「疎開」で苦労していた図書館員の思いを共有化できる司書集団の形成が困難となっているのです。

改めて、図書を将来に残す意義を確認し、その実現を図りたいと思うものです。

わたしたちの

お祭り

8月

カレン族
ラクキチュ祭り

カレン族の伝統衣装をまとい、神聖な糸を腕に巻きつけてもらう（上3点写真：渋谷敦志）

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所図書館アシスタント調整員のスィラです。

毎年8月の満月の日、カレン族の伝統的祭事「ラクキチュ」（カレン語で「腕に紐を結ぶ」の意味）が開催されます。参加者は伝統衣装を身に着け、ひとつひとつに特別な意味が込められた冷水、白い糸、米、バナナの皮に包まれたもち米、バナナ、花の枝、サトウキビといった7つの道具を使いながら、年長者が魂を呼び寄せる祈りを唱え、神聖な糸を年少者の腕に巻きつけていきます。この行為により、魂と体が一つになり、人々に健康や幸福をもたらし、さらに民族の結束に繋がると信じられています。

この祭りは、タイの難民キャンプでも難民キャンプリーダーが中心となって、伝統文化の維持、そして民族の結束を願って毎年開催されています。私が参加したウンピアム難民キャンプでは、伝統舞踊の披露や伝統料理コンテストもあり、多くの住民がこの祭りを楽しみました。

世界の絵本を読んでみよう 13

学校へ行きたい ワー・ワー・ポー

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
創作絵本　2007年

1
むかしむかし、ワー・ワー・ポーという小さな女の子がいました。お父さん、お母さん、3人の弟といっしょにくらしていました。

2
2人の弟は学校にかよっていました。でも、ワー・ワー・ポーは行くことができず、弟たちのめんどうをみなければなりませんでした。

3
ある日、ワー・ワー・ポーはお父さんに、「私も学校に行きたい！」とたのみました。しかしお父さんは、「おまえは勉強しなくていい。結婚したら、おむこさんがせわをしてくれるんだからね。」と言ったのです。ワー・ワー・ポーは悲しくて、泣きました。

4
ワー・ワー・ポーはまいにちこっそり学校へ行って、先生の話を聞くことにしました。

5
新しい女の先生が村にやってきました。その先生は、ワー・ワー・ポーが教室の外から、授業を聞いていることに気づいていました。

6
ある日、先生はワー・ワー・ポーの家をたずねました。そして、ワー・ワー・ポーが勉強したくてもできないことを知りました。

7
先生は、村の大人をあつめて言いました。「村の子どもすべてが勉強できるようにしなければなりません」。村人は先生の意見を聞こうとしませんでした。しかし、最後には、みんなが先生にさんせいしました。

8
こうして、ワー・ワー・ポーは学校で勉強できるようになり、クラスにたくさんの友だちができ、とても幸せにすごしました。

シャンティな人たち

शांति

vol. 72

荒川区職員ボランティア協会

荒川区職員ボランティア協会（以下ＡＶＡと略す）は、荒川区役所の職員有志が給与の端数を毎月積み立て、それを原資として社会貢献活動を行っている団体です。シャンティとは、２０１１年にメラウ難民キャンプにある図書館再建支援をして下さったことが最初の出逢いでした。今回、このＡＶＡの生みの親である西川太一郎荒川区長に立ち上げの経緯を伺うとともに、ＡＶＡのメンバーにもお話しいただきました。

AVA メンバーが子どもたちへ送るために手作りしたぬいぐるみを手に西川荒川区長

２００６年、西川区長が友人である金井昭雄さん（富士メガネ会長兼社長）のナンセン賞受賞祝賀会に参加した際に、この会場で高杉暢也さん（元韓国富士ゼロックス会長）から富士ゼロックス社の取り組みを聞いたのが、ＡＶＡ発足のきっかけでした。ナンセン賞は難民支援に多大な貢献をした方を称える賞で、金井昭雄さんはメガネの提供を中心にした難民支援を評価されて、日本人として初めて受賞された方です。

区長は金井昭雄さんの活動に感銘を受けるとともに、富士ゼロックス社の「端数倶楽部」から着想を得て、職員に対して同様の取り組みを呼びかけたところ、広く賛同が得られたことから、「世界の子どもたちの幸せのために」との活動方針を掲げたＡＶＡが立ち上がりました。

荒川区では、かねてから本が子どもたちに与える力に着目し、全小中学校へ司書を配置するなどの学校図書館の充実や図書館事業の充実を図っていました。区主催の絵本大賞の選考委員も務める作家の柳田邦男さんにＡＶＡの支援先を相談したところ、シャンティを推薦してくださり、ご縁がつながりました。荒川区とシャンティに「図書館」という共通点があって、実った関係でした。

最初の支援は、メラウ難民キャンプのコミュニティ図書館の再建でした。２０１１年11月２日、ＡＶＡのメンバー10人が、図書館開館式典参加のため、難民キャンプを訪問されました。難民キャンプまでは悪路続きで、道中、泥にはまった対向車を救助したかと思えば、排気口が塞がるほどの水かさのある川に流されそうになる場面にも遭遇しました。しかし、到着した図書館では、集まった２５０人もの子どもたちがＡＶＡメンバーによる「がらがらどん」の読み聞かせに大喜び。「おおきなかぶ」のお芝居、ペープサート（紙製人形による劇）に大喜び。

参加したＡＶＡメンバーの室伏さんと村田さんは、「図書館に集まってくれた子どもたちの輝く瞳を忘れられません。図書館が子どもたちの情報元であり未来だと言っていたことに感動しました。多くの人たちに、難民キャンプの子どもたちと接して知ってほしい」と語ってくれました。

最後に難民キャンプの子どもたちへのメッセージとして、西川区長からお言葉をいただきました。

『艱難汝玉にす（かんなんなんじをたま）』。

「難民キャンプでは苦労・困難・絶望が尽きないと思うが、望みを捨てないでください。君たちのことを思っているおじさんやおばさんたちがここ荒川区にいることを忘れないで欲しい」と。

（海外事業課　鈴木淳子）

上：キャンプへの道中、泥にはまった対向車を救助
中：水かさの増した川を横断
下：2011 年 11 月、メラウ難民キャンプでの式典に参加した AVA のメンバー

山田町立図書館へ車両の寄贈を行いました

報告：三木真冴（岩手事務所）　岩手 Japan

2011年7月から継続してきた山田町での移動図書館活動が2016年1月より山田町立図書館へ引継がれることになりました。岩手の活動地の中で山田町だけが行政として移動図書館を行っておらず、岩手事務所の活動が終了した後が課題になっていました。そこで山田町立図書館と協議を重ねてきました。

岩手事務所が使用してきた移動図書館車の寄贈を検討しましたが、維持費がかかることから、岩手事務所で使っている普通自動車に本を載せて移動図書館用の車両として寄贈することになりました。

2015年12月に車両贈呈式を行い、市川常務理事より甲斐谷山田副町長に鍵が手渡されました。「仮設住宅に入居している被災された方の心に配慮した活動だった」というお言葉を副町長から頂きました。

1月から山田町立図書館の移動図書館活動を岩手事務所がサポートしています。利用者からは「継続して来てくれてうれしい」と好評です。以前より本の数は減りましたが、利用者とのコミュニケーションを取り、たくさんのリクエストを頂いています。

今、「まちづくり協議会」で話し合われていること

Japan 気仙沼　報告：白鳥孝太（気仙沼事務所）

「あの日の事を、どう伝えていったらいいのかねぇ」。公民館で話し合いは続きます。震災から間もなく5年を迎える、ある晩の階上（はしかみ）地区まちづくり協議会でのことです。

気仙沼市は、後世に震災を伝えるための遺構として、被災した「旧気仙沼向洋高校」（写真）の校舎の保存を検討中です。津波の直撃を受けた4階建ての校舎は、外壁の一部が剥ぎ取られています。かつて校舎の周辺にあった街は、跡形も無くなりました。あの日、ここでも大勢の方々が亡くなりました。あの時の事を伝えられる場所や建物は、年月とともに、次々に消えて行きましたが、この校舎の中だけは、時間が止まっています。3階の教室には、津波で流されて来た自動車が、裏返しのままでそこにあります。黒板には、生徒の無事を確認した筆跡が残っています。屋上に上がれば海が一望できます。海風を受けながら、今日の景色とあの日、屋上で撮られた濁流の写真とを重ねられる貴重な場所です。

今、まちづくり協議会では、この校舎を活かしながら、海と共に生きてきた地域の歴史や文化、自然を畏れ敬う心をいかに伝えて行くのか、話し合いを重ねています。

走れ、つながれ常磐線!

報告：古賀東彦（山元事務所）　山元 Japan

2011年3月11日、津波は線路を越え、駅舎を破壊し、山元町に襲いかかりました。震災から5年経つ現在も、常磐線は寸断されたままです。

山元から仙台方面に出るには、隣町の亘理駅まで代行バスを使い、電車に乗り換えます。乗り継ぎがよく、不便はないようですが、何かが違う。いま、役場前や国道沿いにぽつんと立つバス停には、駅から広がるような賑わいがないのです。

現在、山元町では、以前より山側に高架路線を走らせる敷設工事（写真は新坂元駅付近）が急ピッチで進められています。完成すれば、震災前のように仙台まで乗り換えなしで出ることができます。駅のまわりには新たにスーパーやドラッグストアなど商業施設もオープンする予定です。2月、コンビニがいち早く開業しました。新築復旧される小学校もあります。

2015年11月、うれしいニュースが舞い込んできました。常磐線の再開通が2017年春から2016年12月に前倒しになったというのです。人が行き交う活気を町にもたらしてくれるものと期待が膨らみます。

チャリティイベント開催「宮本貴奈スペシャルピアノコンサート」

Japan 東京　報告：平島容子（東京事務所）

2015年12月2日、児童書出版「ポプラ社」ホールにて、12月10日のシャンティ設立日にあわせたチャリティコンサートを開催しました。

世界的に活躍するお二人、ジャズピアニストの宮本貴奈さんとシンガーのSHANTIさんの、心に響くすてきな演奏と歌をお届けしました。91人の方がご参加くださり、肌寒い気候にもかかわらず、開場前からロビーは熱気に包まれ、演奏がスタートするとあっという間に会場はピアノの音に引き込まれました。「ニューシネマパラダイス」「モルダウ」などの名曲から、中盤はお二人のオリジナル曲、クリスマスソングも多数聞かせていただきました。

司会は広報課インターンの二人がつとめました。緊張しながらの進行がなかなか面白く、会場は終始穏やかな微笑みで包まれました。

音楽も本も人々に活力をくれます。シャンティをご支援いただいている方も、このイベントではじめてシャンティの活動を知った方も、一緒に、音楽のちから、本のちからを感じることができました。

緊急救援室から

茨城県常総市での支援活動完了報告

2015年9月に北関東や東北を襲った豪雨災害で大きな被害を受けた、茨城県常総市にて、県災害ボランティアセンターの運営支援及び、東京災害ボランティアネットワークと連携したサロン活動をおこないました。

「2階が大丈夫でも1階が被災していると水道周りが使えないから、お茶飲みの場は助かる」といった声も聞かれました。

サロン活動は12月で終了しましたが、1月以降は住民の方たちの手でサロン活動の運営が続けられていくことになりました。

ネパールでの支援活動中間報告

ヌワコット郡にて124棟の竹製・鉄製仮教室、トイレ17棟と飲料水設備14個の設置、対象校すべてに学用品と絵本の配布を行いました。また、人身売買や生活再建が困難な女性たちのための避難所と本棚も設置した子どもの遊び場を4郡に7棟建設しています（2月完成）。

1月15日には国を挙げての復興式典があり、当会も参列しました。現在は、復興事業として耐震化恒久学校の建設に取り組んでいます。学校やコミュニティの協力の下、4月末に完了する予定です。

ヌワコット郡・ケシュトラパタル高校

ホットケーキが好評だったサロン活動

シャンティからのお知らせ

萩原宏子が「アーユス賞」を授賞しました

今後の国際協力NGO界を支えていくことが期待される有望な人材に対して、アーユス仏教国際協力ネットワークから贈られる「NGO新人賞（奨励賞）」をカンボジア事務所の萩原宏子が受賞いたしました。

2015年度の絵本が旅立ちました

2015年度「絵本を届ける運動」では16,600冊を超える絵本を集めることができました。参加いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

船便・航空便にて日本から旅立った絵本は、3月から5月にかけて各活動地に到着し、コミュニティ図書館や学校などに配布されます。また、移動図書館でも活用されていきます。今回、200箱を超える段ボール箱に絵本を詰めて送りましたが、絵本の修正作業・箱詰め作業は、「おんなじ空ネットワーク」様（長野県松本市）にもご協力いただきました。

今年は18,164冊を集める予定です。昨年より1,500冊多くなります。皆さまのお申込みを心よりお待ちしております。

東京事務所からの絵本の運び出し

クラフトエイドの新しいカタログができました!

ひとまわり小さいサイズになって、2016年クラフトエイドのカタログができあがりました。今年もプロのデザイナー（Fuji Tate P）による新しい商品をたくさん紹介しています。2016年のカタログは、商品に使われている『刺繍』や『手織り』、『草木染め』の素材を少しでもわかりやすくお伝えできればと思っています。

また、5年を迎える「東日本大震災」に関する弊会の活動の特集、いつもクラフトを支えていただいているボランティアさんの紹介もしています。通販カタログとしてだけでなく、「繋がる・支える」といったシャンティのメッセージも感じていただければ幸いです。

人事のお知らせ

●入職

瀧龍太郎　海外事業課経理担当（1月1日付）

●異動

神崎愛子　海外事業課課長から支援者リレーションズディレクターへ（2月1日付）

山本英里　海外事業課課長へ（2月1日付）
※2016年2月1日復職

●退職

村中一欽　岩手事務所図書館活動プログラム担当（3月31日付）

清野陽子　広報課（3月31日付）

編集後記

NHK連続テレビ小説「あさが来た」が終わってしまいましたね。明治の激動期を女性実業家として進んだ主人公の生き様に励まされ、発奮してきた半年でした。
このたび、シャンティを卒業することになりました。2009年春から7年間「shanti」編集を担当したことは私の財産です。これからは一会員として応援していきます。ありがとうございました。（清野陽子）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

GREEN PRINTING JFPI
P-810164

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C009309

VOC FREE™

「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

シャンティ　2016年春　284号
2016年4月1日発行

発行人　若林恭英
発行所　公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233　FAX 03-5360-1220
WEB：http://www.sva.or.jp　E-Mail：info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724
編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞
印刷　株式会社大川印刷　［定価550円］

©2015. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

巻末言

道

亡き母の文庫活動の想いで建設した
Miyoko Memorial図書館

物語の中で、小さなヤギは私、トロルを退治する大きなヤギが彼だった。

友だちと一緒に絵本が読めた

専務理事　茅野俊幸（ちのしゅんこう）

私が子どもの頃、うちの母親が運営する子ども文庫に通い、そこで沢山の絵本を読んだ。時々、近所の仲の良い友だちも文庫にやって来ては絵本を読んでいた。その友だちは聴覚に障がいがあったが、彼はいつも笑顔で私に接してくれた。私も身振り手振りで彼とコミュニケーションをしていた。

ある時、彼から筆談で「一緒に絵本を読もう！」と勧められ、私は一瞬、戸惑った。どうやって一緒に読めばよいのか？しかし、彼が文庫の書棚から『三匹のやぎのがらがらどん』という絵本を持ってきて、本を開いた瞬間、彼と私は絵本の世界で一つになった。絵と文字を一緒に追いながら、物語の中で、小さなヤギは私、トロルを退治する大きなヤギが彼だった。絵本を閉じた瞬間に「一緒に絵本が読めた！」その感動は今でも私の人生に大きな影響を与えている。「文庫で共に学び、共に生きる」ということが、今の活動に結びつく。

シャンティが活動するミャンマー（ビルマ）難民キャンプでも、キャンプ内に設置された図書館で多くの子どもたちが、絵本に出会い、友だちと楽しい時間を共有している。私は、今までに何度もタイとミャンマーの国境にある難民キャンプを訪問し、子どもたちと交流をしてきた。その中でもウンピアム難民キャンプ内にある図書館に通う、聴覚に障がいのある女の子の笑顔が忘れられない。図書館員を通じて、彼女の気持ちを聞く機会があった。「ここに来れば日々の辛さも忘れられる」「友だちと一緒に絵本を読んで、いろいろな事を学べるし、図書館員の方にやさしくしてもらえるから」と笑顔で答えてくれた。難民キャンプ内の図書館は、日本の読書環境とは違い限られた空間での学びではあるが、子どもたちに光を与えてくれている。そして、子どもたちに心の栄養を与えてくれる場。それがシャンティの図書館活動なのだ。

ミャンマー本国では民政移管が進み、徐々に難民キャンプに居た人々が、帰還に向けたうごきがあるかもしれない。その時が来るまで、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプでは、子どもたちが「友だちと一緒に絵本が読める」読書環境を継続していけたらと思っている。